

# トリチウムが 健康被害に 繋がっている

インフォデミックとは ならない。

Information (情報) と Pandemic (パンデミック) を組み合わせた造語。大量の情報が氾濫し、現実社会に影響を及ぼす現象を言う。西尾正道さんは「偽情報の拡散」と説明している。

福島第一原発の事故が起きたあと、わたしたちは放射能について本を読み、専門家の話を聞き、はたまた線量計で身近な場所を測り、水や食べものを測定所に持ち込むなどしながら暮らしてきた。原発事故から丸十年の日に出版された西尾さんの『被曝 インフォデミック』を読むと、あのころのことがふつふつと浮かん

でいる。でも、あの日々はまだ遠い過去のことではない。原発事故はいまも続いていて、震災の日の夜に出された原子力緊急事態宣言もそのまま。だから放射線被曝、それも低線量の放射線被曝のことは頭の片隅に置いて、気をつけて生活しなければ

『被曝 インフォデミック』は長年、放射線を使っ

てがんの治療してきた西尾さんが、知って欲しいことをまとめた本。原発事故による放射線被曝、隠蔽される健康被害について書かれている。エセ科学やインチキ有識者、原子力「寄生」委員会など、西尾さん持ち前の過激な表現があちこちに出てくるが、ほんとうのことを知って欲しいと思う思いと怒りからの言葉にすぎない。百三十頁ほどなのでゆっくり、繰り返し読むのがいい。

先ごろ、政府が海に流すことを決めた、福島第一原発の敷地内にたまった汚染水に含まれるトリチウムの健康被害についても「トリチウムの問題は単に経済的な問題であるだけでなく、

人類の緩慢な殺人行為であり、晩発性の健康被害をもたらす実害となる問題」と、表や図を用いてわかりやすく説明している。



原発事故後10年をへても放射線による健康被害は軽視、無視されつづけている。

『被曝 インフォデミック』

北海道がんセンター名誉院長

西尾 正道

寿郎社・1210円

ノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊さん(故人)が二〇〇三年、物理学者の長谷川晃さんとともに「良識ある専門知識を持つ物理学者として、トリチウムを燃料とする核融合は極めて危険で、中止してほしい」と、当時の小泉純一郎総理に嘆願書を出していることにもふれている。

また、西尾さんと交流のある脳科学者の黒田洋一郎さんの著書を引用し、トリチウムの脳への長期蓄積などによって、アルツハイマーやパーキンソン病、統合失調症、発達障害が将来、さらに増える危険性があることも伝えている。

そして「これを機会にトリチウムの分離技術を本気で開発すべきであろう。原発事故が起こらなくても、原発稼働によって放出されているトリチウムが健康被害に繋がっていることに政府は真剣に対応すべき。トリチウムは原発から近いほど濃度が高く、生態系の食物連鎖の過程で生物濃縮する。処理コストが安いからといって海洋放出することは、人類に対する緩慢な殺人行為」と、締めくくっている。

